

中村和郎先生に学んだこと

中 田 裕 一

私は、都立大学在学中、1982年提出の卒業論文と、1984年提出の修士論文を、中村和郎先生にご指導いただいた。今、浅学非才の自分を思うとお恥ずかしい限りだが、若かったこともあり、気候学で扱うテーマが地理学の考え方で研究できないかと考えて先生にお願いした。その頃、中村先生は、高橋浩一郎氏らと『衛星でみる日本の気象』（1981、岩波書店）を刊行されたところだった。そのこともあり、私は、気象衛星の画像の雲分布をテーマとすることになった。気象衛星の画像が天気予報で使われるようになり、画像を使った研究が多くなった頃である。

先生は、大学では、地誌学関係の講義をお持ちであった。そこで、まだ保存してある当時の先生の学部の講義ノート（1981年頃、地誌学概説）をひもといてみた。講義ノートの項目を羅列してみると、“地図を読む”と題して、ウェゲナーの大陸移動説、島弧海溝系（system）、気候の空間配置の規則性、大気大循環、方言周圏論、言語年代学、植物地理学、農業の起源、と続く。“人間環境関係”では、決定論、決定論批判、可能論、地誌・地的統一、景観論、諸要素の統合→地域、とある。さらに、“地域論”では、均質地域、機能地域（水系、政治、亜熱帯高気圧）、地域構造、地名、文化構造的な地域、と並ぶ。

こうしてみると、中村先生や地理学者のみなさんによる地理学講座の中の『地理学への招待』（1988、古今書院）、『地域と景観』（1991、古今書院）の構想を中村先生は、この頃すでにお持ちであった。

講義で先生は、「系統科学では好まれないかもしれないが、地域を調べることは、現象をワンセットでとらえることだ」と述べておられた。こうして、当時の先生のことを思い出していると、当時過ごした校舎や講義のご様子、夜の地理科の図書室のこと、古びた扉をノックして先生の研究室をお伺いしご指導いただいたことが走馬燈のように蘇ってきた。その頃、都立大学は、移転前で、地理学科のあった理学部は、深沢校舎とよばれていた。

学生から見る先生は、ソフトな感じだったが、私の研究の取り組みが進んでいないと、厳しい面もあった。千葉県手賀沼の地理学巡検の後、学生みんなで居酒屋に入り生ビールを飲んだ時、先生も「うま

い！」と、おいしそうにお飲みになったことが思い出される。また、院生になってからの軽井沢巡検の夜の学習会で、私はうかつにも居眠りしてしまい、先生にやんわり注意いただいたこともあった。

私は、修士終了後、岐阜県の高校の教師になった。益田（ました）地方の下呂温泉にある高校勤務の時、1997年6月、先生は駒澤大学地理科の学生巡検の指導のため、一度益田地方（下呂町、萩原町）へ来てくださった。地元の益田風という局地風や、風にまつわる民家の造りなどを先生にお話していたため、興味をお持ちになったようであった。

私は恩返しの機会と思い、はりきって案内資料を作成した。そして、1日学校を休み、水害を鎮めるための水神様の石碑や益田造り（益田地方に多い造り）の家など、学生のみなさんを案内し、夜の学習会にも参加させていただいた。先生は、それから半年ほどして、学生のみなさんが作成した『益田川流域の風土』という冊子を送ってくださった。その時、先生からいただいたお手紙には、「一つだけ、全員の成果のまとめとして、地図化する作業を最後までやらせました。……数人の学生が野外調査の方法に興味を抱き、今年の卒論にそれを生かしたいと言ってくれたのがせめてもの救いです。」とある。現地観察や聞き取り調査、統計資料の分析など多彩で、学生のみなさんの真剣な取り組みが伝わる内容だった。

2007年、先生がお書きになった『雲と風を読む』（1991、岩波書店）が16年ぶりに版を大きくして復刊された時、その書籍をお送りいただいた。そのお手紙では、相模原市史の気候の項目をお書きになることが記され、お元気なご様子だった。

その後、すっかりご無沙汰してしまい、昨年（2022年6月）、中村先生ご逝去の報が、大学の同期の学年代表の方から届いた。お元気だったはずなのにとと思う一方、大きな喪失感と時間の流れを感じないではいられない。

ここでは、先生と私の個人的な思い出を記させていただいた。中村先生の温顔を偲び、改めてこの場をお借りして先生のご指導に感謝したい。そして今はただ、先生のご冥福をお祈りするばかりである。

（元岐阜県立高校教員）